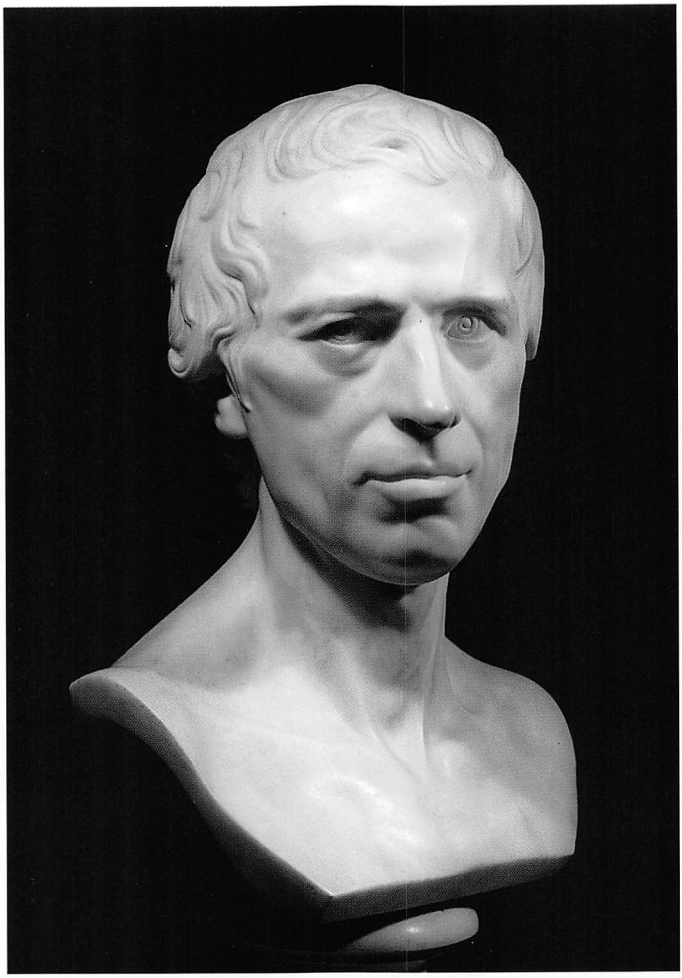
ローレンス・スターン論集

——創作原理としての感情——

坂本　武　著

関西大学出版部



ジョゼフ・ノルケンズによるローレンス・スターンの胸像
By courtesy of the National Portrait Gallery, London

シャンディ・ホール（ヨーク州コックスウォルド村）
By courtesy of the Laurence Sterne Trust

ローレンス・スターン論集

——創作原理としての感情——

坂本　武　著

関西大学出版部

目次

ローレンス・スターン研究の現在——序に代えて　v

第一部　『権争物語』論

第一章　スターンの〈書くこと〉の始まり　3

第二章　『トリストラム・シャンディ』への道——〈鍵〉としての『権争物語』　18

第二部　『ヨリック氏説教集』論

第三章　〈書くこと〉のもう一つの始まり　37

第四章　スターンの教育論——説教第20番　53

第三部　『トリストラム・シャンディ』論

第五章　スターン文学の伝統的解釈　75

第六章　死神と諧謔――センチメンタリズム　92
第七章　〈不敬の疑問符〉――スターンの創作原理考（一）　118
第八章　道化とモラリストの語り――スターンとオースティン　158
第九章　サンチョとブルーストッキング――スターンの女性像　182

第四部　『センチメンタル・ジャーニィ』論
第十章　〈自然〉の表象論　207
第十一章　ディスコース分析――スターンの創作原理考（二）　238

第五部　『イライザに寄せる日記』論
第十二章　懸想と死神――晩年の恋愛遊戯　259
第十三章　スターンの道化　282

附　論
一　漱石のスターン論――『トリストラム、シャンデー』私注　304

二　トマス・パッチの絵のこと　331
三　『権争物語、あるいは夜番外套物語』——抄訳及び書誌的解題　340
初出一覧　393
あとがき　396
スターン略年表　31
精選参考書誌　8
索引　1

ローレンス・スターン研究の現在——序に代えて

イギリス十八世紀を代表する作家の一人であるローレンス・スターンLaurence Sterne（一七一三—六八）の研究は二十世紀後半の一世代、三十年ほどの間に大きな展開を見せた。というのも、スターンのテクストの校訂から伝記研究、同時代の周辺資料の掘り起こしといった、文学研究の主要な分野のいずれにおいても画期的な業績——むしろ事業と言った方がよい——が、この間に次々に出現しているからである。これは十八世紀の他の作家研究の進展状況の中において考えてみても顕著なものがあると言ってよい。一方、スターンの批評研究の分野においても多彩な活動が見られることは言うまでもない。これはわが国のスターン研究にも当然ながら影響を与えており、ことに近年はわが国の研究者がそれぞれの独自性を主張した業績を著わすようになってきたことは喜ぶべきことである。

フロリダ版スターン全集

まずテクスト校訂上の業績としては、メルヴィン・ニューMelvyn Newを中心とした「フロリダ版スターン全集」の刊行事業がある。従来のスターン全集としては、七巻本のシェイクスピア・ヘッド版（一九二七年）、およびW・

L・クロス編の十二巻本全集（一九〇四年。一九二六―二七年および一九七〇年に七巻本のAMSエディション、通称「ヨリック・エディション・デラックス」版に変更）があった。

個別のテクストとしては、J・A・ワーク編の『トリストラム・シャンディ』(James A. Work, ed., *Tristram Shandy*)（一九四〇年）、G・D・スタウト編の『センチメンタル・ジャーニィ』(Gardner D. Stout, Jr., ed., *A Sentimental Journey*)（一九六七年）があり、「書簡集」はL・P・カーティス編（初版一九三五年、後に一九六五、一九六七年版）のもの（Lewis Perry Curtis, ed., *Letters of Laurence Sterne*）がこれまでの決定版となっている。「説教集」としては、マージョリー・ディヴィッド編（抄録）のもの（Marjorie David, ed., *The Sermons of Mr. Yorick*）が一九七三年に出ている。

フロリダ版スターン全集は、これらの諸版を全て見直し、最新の知見を入れた注釈を施して新しい規範（カノン）テクストを提示しようという壮大な試みである。これは、一九七八年の『トリストラム・シャンディ』(M・ニュー、ジョアン・ニュー編、二巻本）のテクストから始められ、『注釈』（*The Notes*）の方（M・ニュー、R・A・デイビスとW・G・デイによる）はそれから六年後の一九八四年に一巻本として刊行された。そして一九九六年に『ヨリック氏説教集』二巻（M・ニュー編によるテクスト一巻と注釈一巻）が出されている。右の二作品の本文と注釈の合計五巻の刊行に達するまでに十八年が経過した訳で、その厳密な本文校訂と厖大な量の注釈作業の困難さをうかがわせるに十分な年月である。じっさい、『トリストラム・シャンディ』第三巻『注釈』は、詳細を極めた注釈の分量が索引を入れて五七二頁にも及ぶという大冊で、『ヨリック氏説教集』の『注釈』ともども、注釈者の多大な努力の跡は明

らかである。

私事にわたることだが、『トリストラム・シャンディ』の注釈に当たった一人、W・G・デイは、筆者が一九八五年から一年間、ケンブリッジに在った時、モードリン・カレッジの図書館に勤めていたが、或る時デイ家に招かれたことがある。その時見せてくれたスターン資料の中で印象的だったのが、フロリダ版注釈の部分を、頁の間に白紙をはさみ込んで特別に製本し直した分厚い一冊であった。その余分の頁にはすでに数多くの手書きによる注が追加されていたのである。注釈という作業には完全と完成ということがないのだ。このことを自覚しているデイの姿勢が強く印象に残った。この一事をもってしても、スターンの注釈というものの際限のない労苦がうかがわれる。

フロリダ版スターン全集の特色は、学問的な校訂に加えて、かつてのどの版よりも「注釈」の部分を重要視し、テクストから独立させた一巻をこれに当てていることである。かような次第であるから、スターンのもう一つの名品、『センチメンタル・ジャーニィ』のテクストと注釈の刊行は、二〇〇〇年を越えていつ頃になるのか見当もつかない。しかし、この全集が二十世紀末を画する業績であることは間違いない。

伝記研究

スターンの伝記研究には、二十世紀初期のパーシィ・フィッツジェラルドの伝記（Percy Fitzgerald, *Life of Laurence Sterne*）（一九〇四―六年、クロスによる再版）があるが、これは一八六四年が初版の、W・M・サッカレイのスターン酷評に対するカウンター・ポートレートを意図したものであった。その後ルイス・メルヴィルの伝

記と書簡集（Lewis Melville [L. S. Benjamin], *The Life and Letters of Laurence Sterne*）（一九一一年）が出たが、多分に「読み物」的であった。やがて、スターンの伝記的事実の掘り起こしが進められて、伝記に学問的正確さが求められてゆく。この流れを象徴し、長くスターン伝の規範となる研究書を著わしたのが、スターン全集も編んだウィルバー・L・クロスである。ちなみにスターン書簡集の編者でもあり、伝記的研究『ローレンス・スターンの政治学』（*The Politics of Laurence Sterne*）（一九二九年）を著わしたL・P・カーティスは、クロス教授のイエール大学時代の教え子である。

クロスの『ローレンス・スターンの生涯とその時代』（*The Life and Times of Laurence Sterne*）は、一九〇九年の初版から、一九二五年の二巻本の改訂版を経て、一九二九年の第三版で完成した。一九六七年版はこれのリプリント版である。

その後、一九四三年にはL・ハートレイ（Lodwick Hartley）の『これぞローレンス』（*This is Lorence*）が出版された。一九六八年には『ローレンス・スターン――伝記的エッセイ』（*Laurence Sterne : A Biographical Essay*）としてその改訂版が出ている。一九七二年にはデイヴィッド・トムソンDavid Thomsonの『ワイルド・イクスカーションズ――ローレンス・スターンの生涯とフィクション』（*Wild Excursions : The Life and Fiction of Laurence Sterne*）が出されたが、ハートレイのものもトムソンのものも文学的エッセイに傾いている。

この他にも一九一〇年のシチェル（Walter Sichel, *Sterne, A Study, To Which is added the Journal to Eliza*）、一九五七年のショウ（Margaret R. B. Shaw, *Laurence Sterne : The Making of a Humorist*）、そして一九六一年

のフリュシェール（Henri Fluchère, *Laurence Sterne, de l'homme à l'oeuvre : Biographie critique et essai d'interpretation de Tristram Shandy*）らによるそれぞれ独自な伝記研究が表われた。

しかし、これらの伝記をすべて凌駕するような学問的伝記研究を成し遂げたのが、アーサー・キャッシュArthur H. Cashである。その第一巻、『ローレンス・スターン伝――初期および中期』（*Laurence Sterne : The Early and Middle Years*）が一九七五年に、その後じつに十一年をかけて続巻の『ローレンス・スターン伝――後期』（*Laurence Sterne : The Later Years*）が一九八六年に出版された。これはキャッシュ教授畢生の労作で、W・L・クロスの文章がなお十九世紀的「物語」のスタイルを保持していたのに対して、キャッシュのそれは伝記的細部の事実の調査をさらに進めた学術的スタイルを取って、しかもなお読み易い研究書として高い評価を得ている。これを凌ぐ伝記研究は、恐らく当分の間登場することはあるまい。

『シャンディアン』誌創刊

M・ニューによるフロリダ版スターン全集とA・キャッシュによる伝記研究にはある共通した特徴がある。むしろ、これらの大業を支える学問的熱意を共有する感覚と言った方がよいかも知れない。このことを説明するためには、ケネス・モンクマンKenneth Monkman（一九一一―九八年）という、その生涯を賭してスターン研究の基礎作りと「シャンディ・ホール」再建事業を果たした人物のことから始めなくてはならない。スターンの一ファンであり、スターン資料のコレクターとして出発したモンクマンは、元来ＢＢＣのスクリプト・ライターを勤めたよう

なジャーナリストであったが、ヨーク州コックスウォルド村のスターンの牧師館が荒廃に瀕していた一九六〇年代、奇特にも私財を抛ってその再建にのり出した。彼の熱意は周囲を動かし、英米のスターン研究者たちを動かして、それまでは農家の住居として使われていた牧師館はついに再建され、一九六六年には「ローレンス・スターン・トラスト」という協会が発足し、その牧師館は「シャンディ・ホール」という名のスターン記念館となった。そこにモンクマンはジューリア夫人と一緒に住み込んで、スターン資料の収集と書誌的研究に当たり、一方では年一回のスターン講座とワイン・パーティによる「友の会」例会を催し、「シャンディ・ホール通信」を発行し、寄附金募集を行なってきたのである。

モンクマンはスターン記念館の名誉館長であったが、同時に書誌学者として多くの業績を残した。彼のスターン資料収集の例として次のような話がある。スターンは牧師としての経歴の始めの頃、叔父のジェイクス・スターンJaques Sterneに勧められてウォルポール寄りの地方紙『ヨーク・ガゼッティア』(*York Gazetteer*)に書簡の形で投稿したことがある。ホイッグ党支持のジェイクスが始めた新聞に甥のローレンスも協力した形で、まだ両者の間に確執が起こる以前の貴重な資料である。モンクマンはスターンの最初期の書簡二通の載った同紙を一九五五年、ヨークの古書籍商で、次いで一九五七年のサザビーのオークションで求め集めたのである。そして彼はこの情報を、ヨーク地方の教会活動の事実関係を調べていたL・P・カーティスに伝えてやった。そこからモンクマンとカーティスの交流が始まったのである。

モンクマンの学問は右のような細心の資料収集に基づいた書誌学で、代表的な業績に、『トリストラム・シャン

ディ』の初期刊行本書誌」（講演録、『ライブラリー』誌25号、一九七〇年）がある。初版以降の出版の事実関係を綿密に比較調査したものである。またスターンの説教集についての継続的な書誌的研究もあり、それらがM・ニューのフロリダ版『説教集』の本文校訂を裏付けているのである（M・ニューによる『説教集』序文）。

モンクマンのこのような姿勢とスターンの牧師館再建への不屈の意志が、M・ニューやA・H・キャッシュ、さらにケンブリッジ大学図書館副館長を務めたJ・C・T・オーツ（同図書館蔵のスターン資料、「オーツ・コレクション」はスターン研究者にとって最重要のものである）や、ヨーク大学のJ・ベルトゥJacques A. Berthoudらをその周囲に引きつけてゆき、こうした関係者の協力で「ローレンス・スターン・トラスト」が実現したのである。そして彼が名誉館長として住み暮した「シャンディ・ホール」は、スターン研究とコレクションの文字通りの拠点となり、スターン・ファンにとっての精神的な拠り所ともなっているのである。この間、一貫してモンクマンを支え、「シャンディ・ホール」の実質的運営に献身的に当たった夫人、ジューリアの存在の大きさは、スターン・トラストに関わる者なら誰でも知っている。

この協会が起こしたスターン研究上の事業が、研究誌『シャンディアン』（*The Shandean; or an Annual Volume Devoted to Laurence Sterne and his Works*）の刊行である。創刊号は一九八九年十一月に出た。編集長はユトレヒト大学のディ・ヴォークトPeter de Voogdで、その編集方針は誌名の副題が示唆するように、世によくある一作家の研究論文を集めた批評誌という形式よりはむしろ、作品と作家の生涯の全局面に関わる歴史的事実の探索と資料収集に重点を置くということにある。

その記念すべき創刊号には、ケンブリッジ大学図書館「オーツ・コレクション」の解題（W・G・デイ）、スターンの書簡をめぐる二、三の書誌的解説（モンクマン、J・ライリー）の他、スターンのテレビ放映についての小文、『トリストラム・シャンディ』のテクストについての書評などである。

『シャンディアン』誌はその後、遅れがちながら号を重ねて第十号（一九九八年号、じっさいは一九九九年刊）を迎えている。このうち第八号（一九九六年）には日本におけるスターン翻訳資料についての石井重光氏による解説が掲載されている。貴重な貢献である。このように英国以外の資料もこの研究誌は積極的に取り入れているのであって、これまでイタリアやオランダ等における翻訳・イラストの資料類も紹介されている。

いずれにしても『シャンディアン』誌の登場によってスターン研究は大きな広がりを見せている訳で、スターンのテクスト解読の上でも文学的研究の上でも、同誌に展開されるスターンの一次資料の「事実」の集積は、今後とも最重要の情報源となってゆくであろう。このような同誌の意義を考えて、本書の巻末には特別に全十号の目次を付している。ちなみに第十号はK・モンクマン追悼号である。

日本におけるスターン研究

海外におけるスターン批評の動向を現時点でまとめることは、本稿の主題として大きすぎる問題であり、批評上の代表的文献は本文の中で取り上げていることでもあるので、ここではその多様性の一端を概観するにとどめよう。

スターンの批評論集としては、古くはジョン・トロウゴット編の「二十世紀批評シリーズ」の中の『ローレンス・

スターン批評論集』(John Traugott, ed., *Laurence Sterne : A Collection of Critical Essays*) があり（一九六八年)、そこでシクロフスキーの「パロディとしての『トリストラム・シャンディ』」やD・W・ジェファスンの「博学の才人(ラーニッド・ウィット)の伝統」論を目にすることが出来たが、その十六年後のヴァレリー・G・マイヤー編の『スターン論集――謎と神秘』（一九八四年）(Valerie Grosvenor Myer, ed., *Laurence Sterne : Riddles and Mysteries*) にはM・ニュー、J・ベルトウ、A・B・ハウズ、W・G・デイといった新しい顔ぶれが揃っている。スターン協会の主要メンバーが入っていることも注目されるところである。最新の論集としてはM・ニュー編の『ローレンス・スターン批評論集』（一九九八年）(M. New, ed., *Critical Essays on Laurence Sterne*) があるが、ここではスターン批評を四つの局面に分類して、代表的研究を配している。一は「インター・テクスト」の観点、二はスターンの「懐疑主義」の側面、三は「エロティシズム」の観点、四は「倫理的」側面、といった問題点である。かつての「時間」論や、「博学の才人」論から移行して、今日の一般的批評動向に合わせた「メタ・フィクション」論や「フェミニズム」的視点が目立つと言える。

これより先に一九九三年四月のスターン・シンポジアム（ヨーク会議）を収録した、ピアース、ディ・ヴォークト編『ローレンス・スターン――モダニズムとポストモダニズム』(D. Pierce and Peter de Voogd, eds., *Laurence Sterne in Modernism and Postmodernism*) が一九九六年に出ているが、ここでは表題のように「ポストモダン」の時代のスターン像を解明しようとしている。同種の論集としては、一九七一年のキャッシュとステッドモンド編『翼ある骸骨』(A. H. Cash and John M. Stedmond, eds., *The Winged Skull*) があり、わが国から『トリストラ

ム・シャンディ』の完訳者として多大な貢献をされた故朱牟田夏雄先生による講演録も入っていることは周知のことであるが、「ポストモダニズム」に焦点を当てた今回のヨーク会議録の方が、当然のことながら研究上の刺激は大きいであろう。

スターンの小説技法の特長として「脱線」と「断片化」があるが、これは小説という形式に本来的に存在する「物語」の構造に対しては、それを解体する方法として認識することが出来る。それは、言ってみれば大きな「物語」への関心が失われつつある今日のポストモダンの時代状況の中では、これに対するアンチテーゼをスターンの方法が示唆しているということであり、そこにスターン文学のもつ今日的な意味合いがある訳である。これの解明がヨーク会議の主題であったと言ってよい。

しかし、M・ニュー編の論集にみるようにスターン文学の捉え方は決して一筋縄ではいかない。その文学世界を構成している古今の西洋文学の伝統が複雑多岐にわたり、その文体がすこぶる特異であり、またスターンその人の本性が中中に捉えがたいところから、そこには格別な捉え難さがある。マイヤー編批評論集の副題にあるように、謎と神秘のヴェールの向こうでスターン一人が老獪な笑いを浮かべているといった具合である。

ところで、右に寸描したところからも推測できるような西欧における層の厚いスターン研究史に比べると、わが国における研究が手薄であるのは、西洋と東洋の言語文化の違い、そして近代の成り立ちの違いを考えれば当然のことである。言うまでもないことだが、われわれにとって英文学研究の基本的位置づけは、西欧全体の受容でしかあり得なかったのであって、わが国のスターン研究のあり方も夏目漱石が明治三十（一八九七）年、初めてのスタ

ーンの紹介文である「トリストラム、シャンデー」を書いて以後の凡そ百年間は、この受容と、そして啓蒙の形態に終始してきたのである。しかし第二次世界大戦後から二十世紀末に至る半世紀の間にわれわれは「受容」大国からの脱却を内からも外からも強く要請されてきたという歴史的経緯がある。

この間のわが国のスターン研究がこの要請にどれだけ応えてきたのかは、俄には断じがたい。しかし、わが国最初のスターン研究書として重要な(スモレット論と併せた)、村上至孝『笑いの文学――スターンとスモレット』(一九五五年、研究社)以後、長い空白の期間を置いてではあるが、一九九〇年の松尾力雄『ローレンス・スターン研究』(晃洋書房)、一九九四年の能美龍雄『ローレンス・スターンの文学――スターンとその人物たち』(松柏社)、そして一九九五年の伊藤誓『スターン文学のコンテクスト』(法政大学出版局)というように、単行本の形でのスターン研究の成果が次々に現れていることは、長い受容と啓蒙活動の時代が世紀の終わりとともに変わり目を迎えていることを証拠立てるものである。特に『スターン文学のコンテクスト』は、ロックおよびヒュームの理論とスターンとの関係を踏まえて、今日のわれわれにつながる「自我崩壊の危機」の問題を剔出している。さらにスターン批評の一つの可能性として「メニッポス的諷刺」を取り上げるなど、著者の独自の視点を構築しようとする努力が見られる。

右のような単行本類ではなく紀要論文の形で出た文献の場合も、この一世代の間に漸増しているのであって、それらはいわばスターン研究の裾野の広がりを示しているのである。

また近年はスターン特集を組む研究誌さえ現われている。その雑誌とは、新英米文学研究会(東京理科大学)に

よる『*New Perspective*（新英米文学研究）』誌第29巻春／夏号（一九九八年六月）で、特集として『トリストラム・シャンディ』の共同研究の成果を集録した号となっている。そこで展開される議論は、スターン研究の基本的諸問題をほぼ網羅して、作品のもつ今日的意味合いを明らかにしようとしている。共同研究を企画して足かけ六年に及ぶ成果であるという。その意味では、トロウゴットやマイヤー編の論集や、ハロルド・ブルームの現代批評シリーズの中の『トリストラム・シャンディ』論集（一九八七年）とも趣旨を異にし、またヨーク会議集録の「モダニズムとポストモダニズム」論集ともやや性格を異にした、しかし画期的な試みである。その性格の基本はやはり、受容と啓蒙であるが、それとともに六年間の共同研究という形態をとったことを考えると、そこにわが国の研究法の特長が現れていると言うことができる。それは、われわれがこの難解な作品を攻略するためにはむしろ必然的かつ有効な方法であり、その意味で大いに意義のある企画であったということである。参考までに同誌に載った論文題目と著者名を、『シャンディアン』誌の場合と同様に本書の巻末の「精選参考書誌」に記載しておく。

この号に取り上げられたスターンの基本的諸問題とは、例えば登場人物設定の背後に見られる作者のリベラルな宗教観、現実の読者の「生の再統合」を試みる語りの特質、それと関連しての「脱線的」手法の問題、『ドン・キホーテ』の影響の意味、時間と記憶の再編成と歴史性の問題、といったものである。このうち特に、『ドン・キホーテ』の影響を論じた塩田勉論文は、スターンをヨーロッパにおける戦争という同時代史の中に置いて、ルネッサンス・ヒューマニズムと啓蒙思想が宗教的寛容を基にした反戦的思想に結びつくこと、さらにそれが「不可知論」と「虚無」の認識に進んだ結果、いわゆる近代的自我のトラウマが現われたこと、そして作品中の性的表徴はそのトラウ

マを表わすメタファとなっていることを説いて、スターンの「自由（広教）主義」（ラティテューディナリアニズム）の背景的理解を深化させてくれると同時に、フロイトとの親近性を通じてスターンの現代性を主張する好論である。この論文に限らず、他の論者の場合もニュー・ヒストリシズム的な方法意識が見られることは、海外のスターン研究の今日的動向をわが国の研究者が積極的に消化吸収し、発言していることを示す一例である。

本書の構成について

それでは、以上のような展望の中で本書はどのような主張ができるかと自問すれば、筆者もまた受容と啓蒙の中で終始してきたに過ぎないと思われる。しかし一九七〇年にスターンの研究を始めて以来、一世代二〇〇〇年という区切りの時を迎えて自分の仕事をまとめてみることにした。自分なりの問題点を整理し、今後の動向を展望するための中仕切りというところである。研究の出発点から特定の主題に絞ってきた訳ではないので、アプローチの方法も主題もまちまちで分散的である。そこで全体の章の構成を作品の時系列に従って設定することにした。各論文については可能な限り新しい知見を入れるために改題し、それに合わせて必要な修正を施しているが、論考の主題の変更までを意図した訳ではない。附論には、比較文学的研究として漱石のスターン論に関する論考と、スターンのイラストレーションの一例となる小文、そして『権争物語』（*A Political Romance*）の抄訳と書誌的解題を付け加えた。

ここで『権争物語』の邦題について一言、述べておきたい。この作品はスターンの最初の作品であるが、作者の

生前には公にされなかったという事情があった。その呼び方の基本型は『権争物語』であるが、スターンの死後は物語の内容の点から『夜番外套物語』(*The History of a good warm Watch Coat*) という呼び方が広く行なわれるようになったのである。便宜上、本書第一章では前者の基本的な題名に従ったが、附論の方では右のような経緯をふまえて両者を合わせることにした。不統一の感は否めないが、その間の事情は「解題」の方に譲りたい。

本書の全体にわたって典拠として用いたテクスト類については、前述のように今日ではフロリダ版が有効であるが、同版は普及版とは言い難いので、参照のしやすさを考えて旧稿のままとしたものもある。